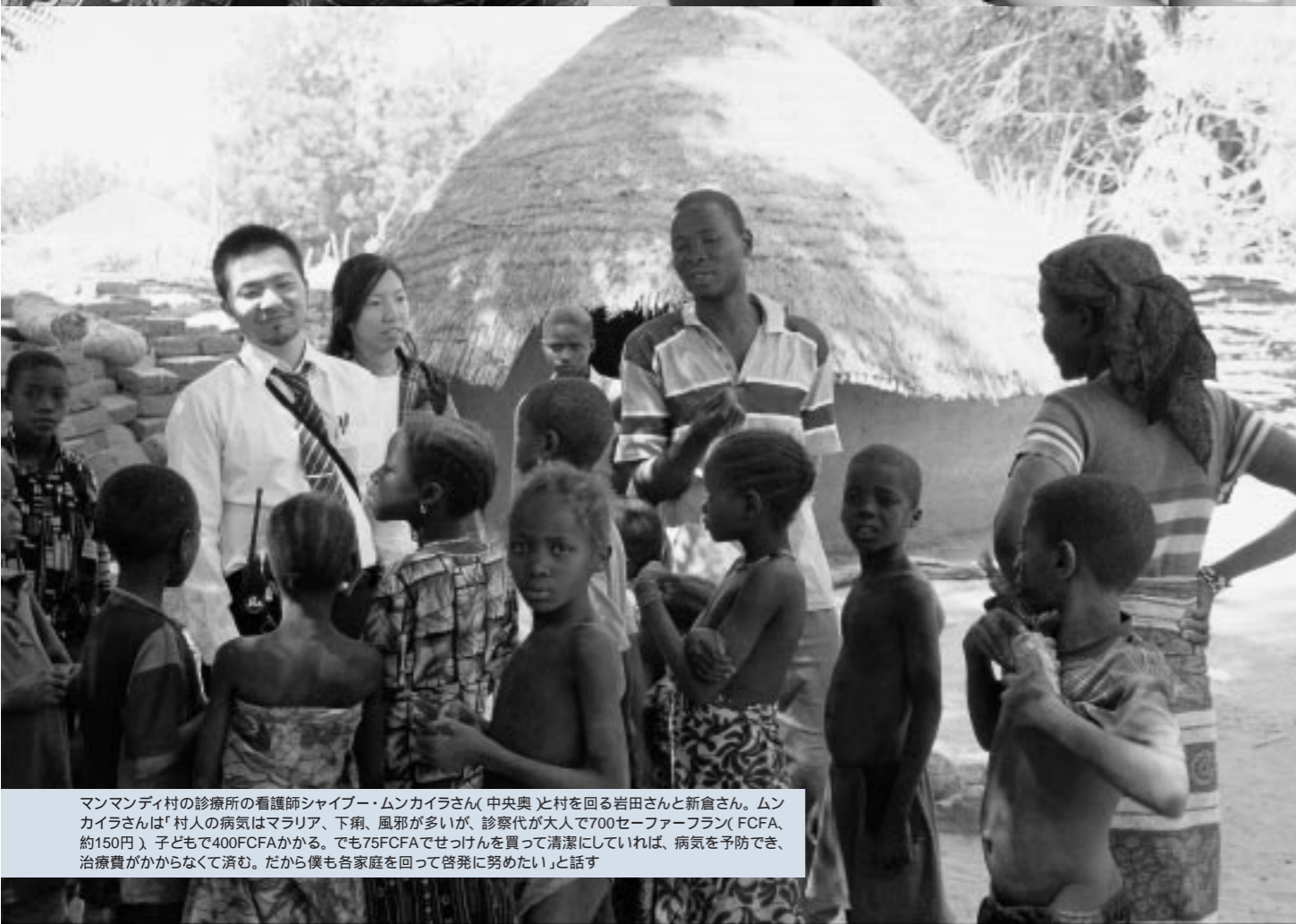




グループで作成したポスターを使って、村の母親たちに栄養指導を行う富永さん



マンマンディ村の診療所の看護師シャイブー・ムンカイラさん(中央奥)と村を回る岩田さんと新倉さん。ムンカイラさんは「村人の病気はマラリア、下痢、風邪が多いが、診察代が大人で700セーファーフラン(FCFA、約150円) 子どもで400FCFAかかる。でも75FCFAでせっけんを買って清潔にしていれば、病気を予防でき、治療費がかからなくて済む。だから僕も各家庭を回って啓発に努めたい」と話す



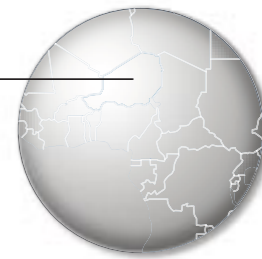
マンマンディ小学校で、「手はきれいに洗っているかな?」「つめはちゃんと切つてあるかな?」と子どもたちに聞く岩田さん

FIELD SKETCH

学校保健で村のみんなを健康に

世界最貧国に位置付けられる西アフリカ・ニジェールでは、不衛生な生活環境のために下痢や感染症で命を失う子どもが多い。そこで、青年海外協力隊のグループが現地の関係機関と協力して、保健衛生の知識を子どもたちに身に付けてもらうため、小学校での保健衛生教育プログラムに取り組んでいる。

ニジェール
NIGER



協力隊グループが作成した教材や教員用の指導書。保健衛生の授業は週1回30分間で、学習テーマは「ばい菌」「身体衛生」「トイレ」「下痢」「環境衛生(ごみの処理)」「風邪」「マラリア」「成長と栄養」の8つ。指導書には学年ごとの学習プロセス図や、イラストを用いた授業展開の解説、授業計画表の例なども記載されている

保健衛生の授業を導入

「みんな、ちゃんとせっけんを使って手を洗っているかな?」

「はい」

「じゃあ、誰か洗い方の見本を見せてくれる?」

「.....」

ここはニジェール南部、ドッソ県マンマンディ村の小学校。ヒエの茎を編んで作られた小さな教室で、1年生約30人に、現地の言葉ザルマ語で問いかけているのは、青年海外協力隊シニア隊員の岩田守雄さん。思わぬ発表の場に、子どもたちは恥ずかし

そうに顔を見合わせている。「私できるよ」と女の子が一人、おそおすと前に出て、やかなの水とせっけんを使った手洗いを見せる。

今、ドッソ県の小学校では、こうした保健衛生の授業が広がりつつある。普及を支援しているのが、岩田さんら「ドッソ学校保健協力隊グループ」だ。授業はもちろん先生が行うが、この日は子どもたちの理解度を見ようと岩田さんが実演。身振り手振りで分かりやすく話す彼の言葉に、子どもたちもじっと耳を傾けている。

グループの活動が始まったのは2002年。ニジェール政府は01年に発表した「教

育開発10カ年計画」の中で学校保健を重要項目に掲げ、その推進に乗り出した。ド

ッソ州では、1997年からルクセンブルクが小学校に教室やトイレ、井戸などを建設する「学校と保健プロジェクト」を実施してきたが、保健教育はほとんど行われていなかった。そこで、協力隊グループが、子どもの保健衛生状態の改善を目指して、保健教育のモデルづくりと普及を支援することになった。これま



でにグループリーダーを務めるシニア隊員のほか、小学校教諭や看護師、栄養士など14人が派遣され、グループ活動のあり方も変化してきた。

グループ活動と「学校保健プログラム」の成長

活動1年目は、ドッソ市内の3つの小学校をパイロット校に選び、隊員自身が保健衛生の模擬授業をしたり、教員用の指導書の作成を支援したり、活動の土台づくりに当たった。2年目は、パイロット校を市内8校、村落部3校に拡大して、教員講習会を開いたほか、「生産実習活動（APP）」²の時間を利用して保健衛生授業を試験的に導入、それをもとに指導書を改訂した。また、「保健クラブ活動」を導入し、学校対抗のこみ拾いコンクールやトイレ清掃コンクールなど子どもたちの意欲を高める試みも支



「生徒たちは保健衛生の授業が好きだし、学んだことを学校だけでなく、家庭や村でも実践していて、生活の改善に役立っています」と話すマンマンディ小学校の先生たち

援 3年目は、パイロット校を村落部で6校追加し、計17校に対して教員講習会、授業の導入、また視学官や指導主事と一

学校保健への取り組みも非常に活発になってきています」とCOGESの重要性を強調する。さらに、「現職教員研修組織（CAPEED）」⁵を利用して、現職教員を対象に保健衛生授業の講習会を実施。それにより、授業を導入する学校が55校に増えている。これらの幅広い取り組みを支えている隊員は06年7月現在7人。保健師の新倉奈々絵さん（7月中旬に任期終了）、小学校教諭の三浦由紀子さんと林優希さん、看護師の江村香さんと加藤好美さん、栄養士の富永明子さんがそれぞれ専門性を生かしつつ補完し合って活動している。岩田さんはグループ活動の取りまとめのほか、関係機関との調整、中央省庁との連携などの業務を担っている。



協力隊グループは毎月、ニュースレターを発行し、学校や州・県庁、市の関係機関、ほかの援助機関などに配布している。対象校の先生たちにそれぞれの学校保健の取り組みについて原稿を書いてもらうことで、モチベーションを高めている

緒にモニタリング・巡回指導などを行った。こうして、授業と保健クラブを2本柱とする「学校保健教育モデル」の改良と拡大に取り組んできた。また、「協力隊グループは現地の関係機関」³と「ドッソ学校保健プログラム実行委員会」³をつくって進めてきたのですが、関係機関の中には協力隊のプログラムだと勘違いする人もいたので、3年目は特に、これがニジェールの人々のプログラムであるという意識が根付くよう、根気よく働きかけました（岩田さん）。

そして4年目の現在、活動は新たな展開を見せている。子どもたちの保健衛生の意識を向上し、行動変容を促すには、学校だけでなく、家庭や地域全体を巻き込むことが重要だ。そこで、保護者や地域住民の参画を図るため、教員、保健クラブの代表児童、保護者会や保健機関など各団体の代表、村長など地域の代表で「学校保健委員会」を組織し、地

地域が学校を守る

マンマンディ小学校では、授業を終えた子どもたちがわらのほうきなど手作りの掃除用具を手に、校内を清掃し始めた。教室や校庭にはごみ箱が設置され、JICAの支援で作成された衛生教育のポスターもあちこちに張られている。同行してくれたドッソ県教育監督局のウッセイニ・タヒルさんは「この学校も以前に比べてとてもきれいになりました。校長先生も先生たちもやる気があっていましたね」と満足げた。

もちろん活動を阻む問題がないわけではない。「現在、ニジェールでは小学校の数が急増していること、教育政策が揺れ動いているために、教員も教育監督局の職員も数が足りない上、頻繁に異動があります。学校保健教育モデルの導入に協力的な先生や職員が突然いなくなってしまうと、また最初から関係づくりをしなければいけないこともしばしばです」と岩田さん。その上、給料の未払いが続いて先生が学校に来なくなったり、先生の不足を補うため、経験も技術も十分でないボランティア教員が増えており、教育の質の低下も懸念されている。

だからこそ、地域の人々が協力して、学校を、子どもたちを、守っていかねければなら

域全体で学校保健に取り組む体制を整えた。

また、そもそも学校運営自体に問題が多い中、保健の分野だけ強化しても限界があるため、「学校運営委員会（COGES）」⁴を民主的な選挙で組織し直して機能を高め、学校運営を改善する試みが始まっている。学校保健委員会や保健クラブもCOGESが支えていくことになる。岩田さんは「ニジェールの学校は政府のサポートが不十分で、先生の意欲も低く、先生同士のつながりも保護者と学校のつながりも弱い。そのため、学校運営がきちんとなされていない場合が多いのです。地域住民が自分たちで民主的なCOGESを立ち上げ、学校の問題を自らの問題として考え始めたことでさまざまな問題が解決し、結果的に



授業で子どもたちの身体測定が行われるようになり、栄養バランスのとれた食事についても指導している。教室には、手洗いの仕方や栄養に関するポスターが張られている

ないのかもしれない。協力隊グループも、教員用の指導書の改良を支援し、ボランティア教員でも授業の質が保証されるよう配慮してきた。今後も授業内容の改善や授業導入校の拡大に努めるとともに、活動の成果を基礎教育省やほかの開発パートナー（援助機関）に紹介し、学校保健プログラムが他州でも導入されることを期待している。

貧困、度重なる干ばつ、食料不足：ニジェールの人々が置かれている状況はあまりにも厳しく、ちょっとした病気が簡単に命を奪ってしまう。だが、手洗いや掃除など、基本的な衛生知識を身に付け実践することで、失わなくていい命が守られる。そして、子どもたちが元気で、質の良い教育を受けることができれば、自分たちの村やこの国が、貧困から抜け出すための力になるに違いない。

1 2000年にUNESCOが開催した世界教育フォーラムで宣言された「タカール行動枠組み」の中で学校保健の重要性が強調され、それを受けてニジェール政府も取り組みを開始した

2 児童が地域社会を理解し、実際の生活に役立つ技術、知識を身に付けることを目的とした時間

3 ドッソ州基礎教育識字局、ドッソ県初等教育監督局、ドッソ市初等教育監督局、ドッソ州保健局、ドッソ県保健局

4 ニジェール政府は、地域住民の学校運営への参加を通じて教育に対する信頼を回復するため、校長、教員代表、保護者代表、母親会もしくはコミュニティの女性グループ代表、児童代表で編成される学校運営委員会（COGES）の設置を進めていた。JICAはタウアラ州で民主的な選挙でCOGESを組織し、住民参加によって学校運営の改善を図る、住民参画型学校運営改善計画」を実施しており、そのモデルをドッソ学校保健プログラムでも応用した。

5 各地域の30校程度で組織され、各CAPEEDがテーマを設定し、教員間での定期的な勉強会が行われている。ドッソ県で17のCAPEEDがある。



今年6月、教育省のカリキュラム局と教員養成局のスタッフが活動を視察。対象校の一つ、カルギ・バング小学校を訪問し、先生やカルギ・バング村診療所の看護師も交えてみんなで記念撮影。後列右端から加藤さん、林さん、左端からボランティア調整員の豊田美恵さん、JICA事務所のラヒラ・パシャードさん、新倉さん、富永さん



ほかのクラスの生徒の啓発のために発表する保健クラブの子どもたち。保健クラブの活動では、子どもたちが主体的に、楽しみながら、授業で得た知識を実践できるように配慮し、子どもたちの行動が変わることで保護者や地域への啓発効果も狙っている